

がん研有明病院への留学レポート

宗岡 悠介

消化器・一般外科学教室 若井俊文教授の御高配を賜り、二〇一九年四月よりがん研有明病院 消化器センター胃外科にて国内留学をさせていただいており、研修の現状について御報告させていただきます。

生まれも育ちも新潟で、外に出たことなかった私にとって、東京生活のスタートは刺激的なものであった。徒歩での通勤路では東京オリンピックのテニス試合会場を筆頭に、様々な新施設が建設真っ只中で、日毎に変わっていく街並みを見て、来る二〇二〇年への期待と高揚を感じずにはいられなかった。

がん研有明病院 消化器外科は、日本屈指のハイボリュームセンターである。二〇一九年の年間総手術件数は約二七〇〇件で、私の所属する胃外科は六六〇件、うち原発胃癌切除は四六八件であった。ものすごい数だ。そんな環境の中で私に課せられた業務は、病棟番なる全病棟患者の管理と予約外受診の外来患者の対応をしながら、その合間に術中内視鏡のために手術室に呼び出され、すべての手術の標本整理を行うという、非常にハードなものであった。この下積み生活は正直かなり辛かったが、共にこのタスクをこなしてくれた先輩との友情と日々の娘の成長と妻のサポートを心の拠り所にしてなんとか乗り切れた。

そんな滝行のような一年間の中でも、やはりここでできない経験もさせてもらった。世界の佐野武先生の手術の第一助手を担当させていただき、達人の美しい手術に感銘を受けたし、布部創也先生の中国での出張手術に助手として同行し、海外でしかも全く言葉が通じない状況下でのライブ手術に携わったことは忘れられない思い出になった。

そうして迎えた二〇二〇年。こんな世界になることを誰が想像したであ



コロナ対策のため、飲食時以外はマスク着用が義務付けられています

ろくか。COVID-19の院内感染対策のために、職員入口にはA Iサーモカメラが設置され、毎朝自分の体温が管理されるシステムができた。術前後の全症例を提示して、英語プレゼンを行うがん研名物の消化器外科カンファレンスは時間短縮を目的に複雑な症例のみに限定し、日本語でのプレゼンになった。それ以外の小規模なカンファは全て消滅した。そんな中でチーフレジデントを拝命し、手術のチャンスも増えてきて、いよいよこれからだということであったが、四月十九日の日曜日、佐野院長より「院内スタッフにCOVID-19感染者が発生し、明日以降の手術は全て延期」という旨の緊急メールが送られてきた。せっかく東京まで来たのに、胃がん手術の修練はできず、COVID-19診療に従事することになるのかと落胆したが、幸いそれ以外の感染者は発生せず、一週間の手術延期のみで済み、GW返上で延期となった患者の手術をこなして、以降は通常通りの診療を継続できている。しかし、不要不急の検診がなされていない情勢のため、胃がんを含めた全領域で手術症例数は例年より激減する見込みであり、非常に残念だが、その中で最大限の成果が得られるよう努力したいと思う。

研究については同門の大橋学先生に熱い御指導を賜り、ありがたい限りである。前任の加納陽介先生が素晴らしい功績を挙げられたため、大きなプレッシャーを感じて焦っていた私に「業績のためとばかり考えていると必ず行き詰まる。患者のためとなり、同僚の役にも立つメッセージのある研究を立案し、誰かのためになると思いながら仕事をするようにしなさい」という金言をいただき、心が救われた。その言葉を胸に刻み、励んでいきたい。

がん研での研修も残り九か月になるが、加納先生に引き続き、自分もこの環境の中で活躍することで、新潟の素晴らしい先生方のもとで培った臨床力は、全国でも十分に通用するということを後輩達に示したい。新潟に帰った際に、少しでも成長した姿を見せられるよう、一日一日を大切に過ごしていきたい。

(平成二十四年入会)

